第　40　号

県中教研
特別活動部会だより

発 行 日　令和7年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　横山絵里子
題　　字　金山　泰仁　先生

実践につながる話合い活動の充実

指導主事　橘　　恭幸

「なすことによって学ぶ」を方法原理としている特別活動においては、学級や学校生活には自分たちで解決できる課題があること、その課題を自分たちで見いだすことが必要であること、単に話し合えば解決するのではなく、その後の実践に取り組み、振り返って成果や課題を明らかにし、次なる課題解決に向かうこと等が大切であることに気付いたり、その方法や手順を体得できるようにしたりすることが求められます。

本年度、研究大会の全ての授業で、学級活動の話合い活動を通して、合意形成や意思決定して実践しようとする生徒の育成を目指した授業が行われました。そして、東部地区、西部地区のどちらの大会でも、学級活動⑴の指導で、議題に合唱コンクールが取り上げられていました。授業では、よりよい合唱をつくり上げたいという切実感から学級全体の課題を見いだし、目標達成のために、話合いを通して合意形成したことを実践していこうとする生徒の姿が印象的でした。

学習指導要領には、「学級活動⑴の指導に当たっては、集団としての意見をまとめる話合い活動等、小学校からの積み重ねや経験を生かし、それらを発展させることができるよう工夫すること」とあります。中学校における話合い活動の活性化を図るためには、生徒が小学校でどのような話合い活動を経験してきたかを中学校の教師が把握して指導計画を立案するとともに、生徒が小学校における学級活動の経験を生かすことのできる環境を整えることが大切です。

小中が連携し、小中全教職員の共通理解の下で９年間を見通して話合い活動の指導を計画的に行い、小学校で培ってきた話合い活動のスキルを中学校で生かして合意形成や意思決定し、さらに実践につながる話合い活動が活性化されていくことを期待します。

（西部教育事務所）

決めたことを実践しようとする生徒へ

部長　横山絵里子

今年度の特別活動部会は、「学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。－話合い活動を通して、合意形成や意思決定をして実践しようとする生徒の育成を目指して－」を研究主題として研究を進めました。

昨年度まで継続して研修してきた、学習過程の中で合意形成や意思決定を目指す話合い活動から一歩前進し、実践しようとする生徒の育成を目指して研修に取り組みました。

第68回研究大会では、東部地区は入善町立入善西中学校、西部地区は氷見市立南部中学校を会場として研究大会を開催することができました。合唱コンクールという学校行事に向けた取組と、進路選択に向けた取組に関する授業提案がありました。どちらの学校も、授業担当者だけではなく、学校全体として長期間にわたり計画的に準備等に取り組んでいただいた様子が伝わりました。本当に感謝しております。

どの授業も、話合いの「ルール」や「スキル」をよく生徒が身に付けていました。その成果もあり、生徒達は主体的に話合い活動を運営し、問題を自分事として捉え、合意形成や意思決定に向け積極的に意見を出し合っていました。まず、クラスで生徒が自分の意見を出すことができるためには、生徒同士のよい人間関係や教師と生徒の信頼関係が土台にあります。この土台や雰囲気づくりが学級経営の基本となりますが、その一部を担う特別活動の重要性を感じました。

さらに、決めたことの実践に向け生徒の活動意欲が高まるような教師の助言がとても大切だと気付くことができました。

今後は、教師が「決めっぱなし、子供に任せっぱなし」にするのではなく、PDCAサイクルを踏まえ、意図的に定期的な振り返りを行うなど、生徒が意欲的に実践を継続できるような手立て等の研修を充実させていきたいと思います。

（富・北部中）

第68回 富山県中学校教育課程研究大会
東部地区（入善町立入善西中学校）

東部地区大会では、入善町立入善西中学校を会場にして、仙名あづさ教諭、大和跳治郎教諭、田村諭士教諭による研究授業が行われた。ここでは、３つの授業の概要と指導助言について報告する。

（第１学年）仙名　あづさ　教諭
題材名　合唱コンクールの取組を振り返ろう

生徒が自由に意見を言い合い、互いを認め合う温かな雰囲気の中、話合いが進められた。合唱練習を重ねる中で、個人が考えた練習成果や課題を、班やクラス全体で共有し、今後の練習の取組について合意形成を目指そうとする姿が見られた。また、生徒同士で意見を引き出そうとする姿や考えを深めようとする様子も見られた。部会協議では、「司会者がすばらしい進行をしていた」「クラスの課題だけでなく、クラスのよさについてもっと引き出してもよかった」「決定事項をもう少し時間をかけてもよかったのではないか」等の意見が挙げられた。金谷浩志指導主事（東部教育事務所）からは、「本題材は、人間関係形成、社会参画、自己実現の３つの視点が意識された構想になっていたこと」「生徒に合意形成への見通しをもたせるために、話合いの展開や板書を工夫することが大切であること」等の助言をいただいた。

山田　怜志（滑・早月中）

（第２学年）大和　跳治郎　教諭
題材名　合唱コンクールに向けた取組を振り返ろう

生徒の司会・運営の下、「合唱コンクール」へのこれまでの取組を振り返った。学級の課題を、音楽的または行動・取組の部分なのか、個人または学級全体に関わることなのか、最優先事項は何かという視点から決めていった。そして、どのような練習態度が学級ではよくないと判断するのか、原因は何なのか、今後どうしていくのかという流れで時間を区切り、話合いを進めた。どの生徒も学級の一員として責任をもって話し合っていた。話合いの内容が逸れそうになった時のみ、教師が助言をすることで、生徒自身の力で課題解決に向けて合意形成をしようという姿につながった。

部会協議では、「生徒の力で学活が運営されていてよかった」「ICTが効果的に活用されていた」「教師の問い返しがよかった」「学級の今後の取組を１つに決める必要はないのではないか」「態度面だけでなく、具体的な方策が出るようにするにはどうすればよいか」等の意見が出された。

立野文州指導主事（西部教育事務所）からは、「人間関係形成、社会参画、自己実現の視点の重要性とそれらを育むための手立て」「学級の決定事項と個の意思決定の関係」「学級活動における小･中の連携」について助言をいただいた。

前田　邦博（富・南部中）

（第３学年）田村　諭士　教諭
題材名　充実した人生と学習　～進学に向けて～

生徒が活発に意見を出し合っている明るい雰囲気の中、現在の学習と将来を結び付けながら、個々の受験勉強への課題からグループで級友の考えを聞いたり、先輩や大人の意見を参考にしたりと、多面的、多角的な意見に触れ、改善策を意思決定する授業が展開された。本時までに各自の考えた学習目標（P）に向けた取組の実践（D）を通して、振り返り（C）から改善（A）するPDCAサイクルで授業が計画され、本時は２周目の計画（P）に当たる授業となっていた。部会協議では、「クラスの学習に関する目標が設定されており、このクラスで受験に向かっていこうという団結力が感じられた」「生涯賃金に関する資料に対して生徒の関心が高かった」「グループでの共有では、同じ班の生徒へのアドバイスを熱心に考え、助言していた」「生涯賃金に関する資料と家庭学習について考えることの繋がりが分かりづらい」「改善策や意思決定の共有をICTで行うと、様々な意見に触れることができる」等の意見が挙げられた。森川誠指導主事（東部教育事務所）からは、「PDCAサイクルで授業を考えることの大切さ」「必要感・切実感のある資料提示の効果」「強い意思で意思決定をするために、多様な意見に触れ、多面的、多角的に考えることの大切さ」等について助言をいただいた。

山岡　李帆（黒・清明中）

第68回 富山県中学校教育課程研究大会
西部地区（氷見市立南部中学校）

西部地区大会では、氷見市立南部中学校を会場として、竹内奎人教諭による研究授業が行われた。「内容(1)ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決」に関して工夫した話合い活動が展開された。

（第２学年）　竹内　奎人　教諭

題材名　STEP　UPプロジェクト
～合唱本番まで残り一週間で取り組むことを考えよう～

１週間後に控えた合唱コンクールを題材に設定したり、事前アンケートの結果から議題設定を行ったりしたことで、生徒に議題を自分事として考えさせる工夫がされていた。また、司会生徒への事前指導や質問への切り返し等が書かれた進行カードの提示等、生徒主体で学級会を行うための工夫があった。本授業では、個で考える時間が十分に確保されており、それぞれの意見を基に、各班で議題を解決するための取組が話し合われた。グループ討議では、付箋を用いて思考を整理したり、取り組むべき課題に優先順位をつけたりするなど議題を焦点化する工夫があった。学級全体の討議では、各グループで出た意見を短冊に示し、ＫＪ法を用いて合意形成を図った。協議会では、「ＫＪ法を活用して意見を出し合うことで、一人一人の意見が取り上げられ、班での話合いがスムーズに行われており、考えが深まっていた」「司会者用の進行カードや話合いについての指導等の事前準備がしっかりとされており、教師は終始サポートに徹するなど、生徒主体で進める手立てが多くなされていた」「本時の学級討議の流れや合意形成までの手順、本時のゴール等を全体で共有しておくことで、より活発な話合いとなったり、班や学級全体での話合いがスムーズに進行したりしたのではないか」「班や学級全体で話合いを行う際は、話合いを始める前に全ての意見や話合いの視点を共有することで、分類したり、比較したりしやすくなり、多数決以外での方法で合意形成が可能になったのではないか」等の意見が挙げられた。

橘恭幸指導主事（西部教育事務所）からは、「ＫＪ法を用いたことは、出された意見を比較し共通点や相違点を見付け、よりよい意見を見いだす方法として効果的であること」「グループ等の小集団で個々の意見を比べ合うことは有効だが、そこでグループの意見としてまとめてしまうと個々の思いが薄れてしまうので、学級全体の話合いでは個人の意見をもとに合意形成することが望ましいこと」「小学校からの積み重ねや経験を生かし、それらを発展させることができるよう、生徒が小学校でどのような話合い活動を経験してきたかを中学校の教師が把握する必要があること」等について助言をいただいた。

朝山　悠星（砺･出町中）、
棹本　隆太（小･蟹谷中）

よりよい校風づくりに寄与する特別活動
～実践成果の上がる合意形成と意思決定を通して～

日本体育大学　体育学部　兼任講師　島田　光美

１　生徒の「参画」を重視した学級づくり

教育の目的は単なる知識の伝達ではなく、人格の完成にあり、生徒が自発的に参加し、自己実現や社会参画を目指すことが求められる。また、学級経営においては、教師の役割が重要であり、生徒が意見や願いを自由に表現できる環境を整えなければならない。生徒が自身の意見を述べることで、主体性が育まれ、学級全体の雰囲気もよくなる。教師が生徒に対してフィードバックを行い、生徒の意見を尊重することで、信頼関係を築くことができる。学級の課題を生徒自身が認識し、改善に向けて考える姿勢も重要である。教師が一方的に課題を指摘するのではなく、生徒に考えさせ、解決策を模索させることで、生徒の自己効力感が高まる。これは、単なる問題解決能力を育むだけでなく、将来的に社会で活躍する力にもつながる。

２　支持的風土を醸成する学級づくり

まじめに当番活動（清掃、給食、日直等）に取り組む生徒が馬鹿にされ、怠けている生徒が得をするような学級生活を送っている中では「努力、誠実、思いやり、責任等」の価値について考えを深める道徳科の授業や特別活動の授業の実施が厳しい。防衛的風土では、生徒はリスクを恐れて意見を言いづらくなるが、支持的風土では、互いに認め合い、協力し合う関係を築くことができる。集団生活機能を高めることにより、自分のことだけを考える集団から、自分にとっても、周囲の人にとっても居心地のよい集団になっていく。支持的風土の醸成に欠かせない年度当初の学級活動とは、年度当初オリエンテーションと学級教育目標の設定と確認である。学級教育目標は１年間のよりどころであり、教師が意図をもって決定する。

３　学級活動の確実な実践

学級活動の内容⑴と内容⑵⑶の実践を通じて生徒同士の関わりを深めることも、学級づくりにおいて重要な要素である。例えば、学級で学級活動委員会を設置し、よりよい学級を目指す話合い活動（合意形成）を行う。この活動では小さな問題と向き合い、ささやかな喜びを共有する。また、生徒一人一人の発意や発想を取り入れる。これにより、生徒はお互いの意見や感情を理解し合い、学級の文化を形成できる。生徒が発言する場を増やすことで、より多くの視点が学級に取り入れられ、創造的なアイディアや解決策が生まれる。また、教師が中心になり、よりよい自分を目指す話合い活動（意思決定）も重要である。よりよい意思決定・合意形成を目指す多くの個人が集まる学級からは、豊かな学級文化が創造される。

生徒が自分たちの学級に誇りをもち、よい学級づくりに貢献できるようになることが重要である。これには教師と生徒の信頼関係が不可欠で、教師が生徒の声を尊重することで、生徒は自ら進んで学級活動に参加するようになる。生徒の参画を重視した学級づくりは、教育の根本的な目標である人格の形成に直結する。教師は環境を整え、生徒が自らの意見を自由に述べる場を確保することで、生徒の主体性や協力性を育むことができる。この過程を通し、学級はよりよいコミュニティへと成長し、生徒自身も社会に貢献できる力を身に付けていくことが期待できる。

村﨑恵利佳（魚・西部中）